

# 校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

## 頑張ると願生る

令和3年度がスタートしました。教職員一同、今年度も子どもたちの健やかな成長を願って、力を合わせて頑張ります。変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、新年度第1号の見出しを「頑張ると願生る」としました。どちらも「がんばる」と読みます。しかし、「願生る」は見慣れない言葉だと思います。私が初めてこの言葉と出会ったのは、10年以上前に参加した「露の新治」という落語家の方の人権講演会です。その時のお話は次のような内容でした。

〇〇さんが中学生の時、「頑張る」を「願生る」と間違えて書いたそうです。それを見たお母さんが偉かった。「がんばるは、こっちの方がいいねえ」とおっしゃった。以来このお家では、「願いに生きる」「願生る」と書いて「がんばる」と読んでいるそうです。競争原理の真ただ中、ナンバーワンを目指してがんばるのは「頑張る」でいいのでしょうか、自分の人生自分が主演、いっぺんしかない人生、自分をほんまに大事にしていく「がんばる」は、願いに生きるの「願生る」の方がふさわしいように思います。まず「願い」をもつこと、そして「無理せず」「あせらず」「頑張らず」あきらめないで挑戦し続けましょう！

新しい年度の始まりにあたり、どの子も新鮮な気持ちでやる気をもっているはずですが、そんな子どもたちが「がんばる」ためには、まわりの私たち大人が「願生る」という発想に立って、子どもたちの「願い」を引き出す働きかけをして応援していくことが大事ではないでしょうか。

あえてここで「引き出す」という言葉を使いました。なぜかと言いますと、どの子も胸に「願い」を抱いているからです。ともすると、私たち大人は、子どもの内面が空っぽで何もないからと、様々な価値観を大人のつくり上げた鑄型に流し込むかのように教え込もうとしがちです。これを繰り返されていると、子どもたちは何も考えず、使命感をもたない意志のない人になってしまいます。そんな子に育ててほしいとだれも望んでいないのですが、そうなるように関わってしまっていることがあるのです。自戒の念をこめて、気をつけたいと思います。人間の本性を善と見た哲学者ジャン・ジャック・ルソーも、著書『エミール』の中で次のように言っています。

「まことに奇妙なことに、子どもを教育しようと考えて以来、人は子どもを導いていくために、競争心、嫉妬心、羨望の念、虚栄心、貪欲、卑屈な恐怖心といったようなものばかり道具に使おうとしてきたのだが、そういう情念はいずれもこのうえなく危険なもので、たちまち醜酵し、体ができあがらないうちにもう心を腐敗させることになる。」

そもそも、ラテン語の Educere（教育）という言葉には「引き出す」という意味があります。また、「教育」の語源であるドイツ語の Erziehung（エアーツィーウング）は、眠っている可能性を覚醒せしめるために奉仕することを意味していました。すなわち、本来、教育とは、子どもの中にある光、眠っている素晴らしい可能性を引き出し、磨き、自由に、心豊かに生きられるように奉仕することであったのです。

露の新治さんの講演会では、他にもいろいろなお話がありました。その一部を紹介します。何かの参考にいただければ幸いです。

〇気づくことは大切である。どんな顔つきでそのことを話しているのか。ひそひそ話をしているのか。それを見たり聞いたりしている側の気持ちの中にそのことが根付いていく。そしてそれが差別になっていくのである。一人一人がしていることは本の些細なことかもしれない。しかし、それを大勢がするととても大きいものになる。この些細なことに命を奪われることもあるから怖い。また、些細なとしか考えていない人はいざというときに差別する側に立つのである。だからこそ、ちょっとだけ自分を見つめる場があるといい。

〇自忬（じしん）と自信、つるんつるんのぺらんぺらん忬なしのぼーとした人間にならないように、自忬（自信）をもて。要するに、しっかりとした忬をもち、自分がしゃきとして自分を伸ばしていくのである。そして、自分自身を見つめ、自分の生き方を問うていく生き方をすることが大切。寄りかかる生き方をするのではなく「加差別（差別している人間）」からの解放をしていくことである。